Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第６章

「二無我の決択」について

望　月　海　慧

はじめに

筆者は、これまで Tāranātha Kun dga' snying po (1575-1635) の *Theg mchog shin tu rgyas pa'i dbu ma chen po rnam par nges pa (dBu ma theg mchog)* に対する研究を行い、次の論考を発表してきた。

1. "On the first Chapter of the *dBu ma theg mchog* by Tāranātha",『印度学仏教学研究』58-3, 2010, pp. (136)-(143).
2. 「Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第２章「一切の所知の境の決択」について」『インド論理学研究』1, 2010, pp. 313-332.
3. 「Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第３章「仏の心髄である法界の決択」について」『身延山大学仏教学部紀要』10, 2010, 1-19.
4. "On the fourth Chapter of the *dBu ma theg mchog* by Tāranātha", *Acta Tibetica et Buddhica* 3, pp. 129-154.
5. 「Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第５章「五法と三性と縁起の決択」について」『身延論叢』, 2011.

本稿はこれらに続くものであり、同論の第６章を考察したものである[1]。テキストの全体の概要や書誌情報などについては、これらの先行する論文を参照いただきたい。

第６章の内容は、タイトルに示されるように、二無我、すなわち人無我と法無我の考察がそのテーマとなっている。無我とは、我の非存在を意味しており、人間の個体存在(pudgala)と諸存在(dharma)を区別して、それぞれにおける我の存在を否定することが論じられている。二無我は瑜伽行派ならびに中観派の論書でも論じられており[2]、本章でも両学派の文献が引用されているが、五性・三性に続いて論じられるものは『入楞伽経』と同じ流れである[3]。

---

[1] B. pp. 27-38; D. 18a1-25b2; L. 24b4-38a5; M. pp. 46-62.
[2] 前者については早島 1985, 舟橋 1965, 篠田 1982, 後者については笠松 1939, 光川 1962 などを参照。
[3] 安井 1974 参照。

Acta Tibetica et Buddhica 3: 109-154, 2010.
© Faculty of Buddhism, Minobusan University, JAPAN

dBu ma theg mchog 第 6 章の構成

本章の概要も、前稿と同じようにYe shes rgya mtshoによる注釈書 *Theg mchog shin tu rgyas pa'i dbu ma chen po rnam par nges pa'i rnam bshad zin bris dbu phyogs legs pa*に基づいてまとめると次のようになる。

1 人無我
1.1 入る在り方の次第 [1-8]
1.2 人無我を論証する論理
1.2.1 人無我に入る論理の解説
1.2.1.1 有為の無常性の論証
1.2.1.1.1 有為の常性の否定による論証 [9-16]
1.2.1.1.2 内の行の常性の否定による論証 [17-36]
1.2.1.1.3 外の行の常性の否定による論証 [37-48]
1.2.1.1.4 剰余の意味[4]
1.2.1.1.4.1 事物の無の無常による論証 [49-63]
1.2.1.1.4.2 無の滅相の空は勝義ではないこと [64-71]
1.2.1.1.4.3 生滅の意味の考察 [72-121]
1.2.1.1.4.4 ［言及なし[5]］
1.2.1.1.4.5 事物と事物の無を有為と説いたもの [122-126]
1.2.1.2 苦の論証 [127-134]
1.2.1.3 作者による空の論証 [135-159]
1.2.2 人無我を論証する論理の詳細な解説
1.2.2.1 人無我を解説する理由 [160-170]
1.2.2.2 論理そのものの解説
1.2.2.2.1 根本の典籍を配置したもの
1.2.2.2.1.1 教典の言葉の配置 [171-174]
1.2.2.2.1.2 マイトレーヤの典籍
1.2.2.2.1.2.1 簡略に説いたもの [175-189]
1.2.2.2.1.2.2 詳細に解説したもの
1.2.2.2.1.2.2.1 人我の実体存在の否定 [190-191]
1.2.2.2.1.2.2.2 我と蘊の一異の否定 [192-195]
1.2.2.2.1.2.2.3 不可言説の人我の否定 [196-199]
1.2.2.2.1.2.2.4 我が行為をもつことの否定

---

[4] 1.2.1.1 注釈書は、無常性の論証は上記の３項目しか立てないが、「無常性を論証した論理の剰余の意味」として言及されるので、第４項目とした。
[5] 剰余の意味に５項目があるとするものの、第４項目に対する言及はない。

1.2.2.2.1.2.2.4.1 識を起こすという主張の否定 [200-203]
1.2.2.2.1.2.2.4.2 自在であるという主張の否定 [204-207]
1.2.2.2.1.2.2.4.3 行為そのもの否定
1.2.2.2.1.2.2.4.3.1 まとめて説いたもの [208-211]
1.2.2.2.1.2.2.4.3.2 詳細に説いたもの [212-219]
1.2.2.2.1.2.2.5 聖教との矛盾を説いたもの [220-223]
1.2.2.2.1.2.2.5.1 努力なしの解脱の獲得 [224-225]
1.2.2.2.1.2.2.5.2 解脱があり得ないこと [226-232]
1.2.2.2.2 その意味をさらに解説したもの
1.2.2.2.2.1 有身見の自性の認識
1.2.2.2.2.1.1 我見の所縁の解説 [233-239]
1.2.2.2.2.1.2 我所執の所縁の解説 [240-242]
1.2.2.2.2.1.3 その境の考察 [243-248]
1.2.2.2.2.1.4 滅見と無明の解説の考察 [249-252]
1.2.2.2.2.2 その把握対象の否定
1.2.2.2.2.2.1 滅見の外境の否定
1.2.2.2.2.2.1.1 一異 [253-256]
1.2.2.2.2.2.1.2 前後 [257-260]
1.2.2.2.2.2.1.3 領受者と領受されるもの [261-266]
1.2.2.2.2.2.1.4 集まったもの [267-270]
1.2.2.2.2.2.1.5 特徴 [271-274]
1.2.2.2.2.2.1.6 区別 [283-285]
1.2.2.2.2.2.1.7 業の作者と異熟の受者 [286-287]
1.2.2.2.2.2.1.8 部分 [288-291]
1.2.2.2.2.2.1.9 遍充されるものと遍充するもの [292-296]
1.2.2.2.2.2.1.10 想 [297-299]
1.2.2.2.2.2.1.11 三蔵の在り方 [300-307]
1.2.2.2.2.2.1.12 ダルマキールティの論理 [308-311]
1.2.2.2.2.2.2 我見を区別した否定[6] [312-318]
1.2.2.2.2.2.2.1 特徴の在り方の否定 [319a]
1.2.2.2.2.2.2.2 相互因果の在り方の否定 [319b-320]
1.2.2.2.2.2.2.3 所依・能依の在り方の否定 [321-322]
1.2.2.2.2.2.2.4 主従の在り方の否定 [323-333]

[6] 注釈書は、Nāgārjuna の *Suhṛllekha* 329 を引用する。

1.3 人無我の意味をまとめたもの [334-337]
2. 法無我
2.1 法我の執着の認識
2.1.1 名称の異門の解説 [338-341]
2.1.2 認識されるものと認識するもの [342]
2.1.3 常と断の二辺の否定方法 [343-353]
2.1.4 執着の考察の有無を区別する門 [354-359]
2.1.5 意味の確定 [360-373]
2.2 法無我を論証する論理
2.2.1 誓願の在り方により説いたもの [374]
2.2.2 法無我を論証する論理による解説
2.2.2.1 事物が真実として存在しないことを確定する論理の解説
2.2.2.1.1 詳細な解説
2.2.2.1.1.1 一般的対象の真実の非存在の論証 [375-381]
2.2.2.1.1.2 一般的種類の真実の非存在の論証 [382-385]
2.2.2.1.1.3 名称と意味の関係の真実の非存在の論証 [386-393]
2.2.2.1.1.4 相続の真実の非存在の論証 [394-404]
2.2.2.1.1.5 二時の真実の非存在の論証 [405-414]
2.2.2.1.2 意味の要約 [415-416]
2.2.2.2 遍充の戯論を否定する論理の解説
2.2.2.2.1 対象の否定
2.2.2.2.1.1 外境の論難 [417-420]
2.2.2.2.1.2 外境を論難する論理の解説 [421-442]
2.2.2.2.2 相の否定
2.2.2.2.2.1 所取と能取が同数であるという主張の否定 [443-444]
2.2.2.2.2.2 種類は不二であるという主張の否定 [445-448]
2.2.2.2.2.3 認識が刹那の部分なしに成立するという主張の否定
2.2.2.2.2.3.1 時を考察して否定するもの [449-456]
2.2.2.2.2.3.2 所作と行為を考察して否定するもの [457-460]
2.2.2.2.3 両者の否定
2.2.2.2.3.1 離一多の論理
2.2.2.2.3.1.1 根本と合わせて否定するもの [461-464]
2.2.2.2.3.1.2 主張の法を論証するもの[465-470]
2.2.2.2.3.1.3 遍充の論証 [471-484]
2.2.2.2.3.1.4 論証の言葉を述べたもの [485-491]

2.2.2.2.3.2 四辺の生を否定する論理

2.2.2.2.3.2.1 根本と合わせて否定するもの [492-493]

2.2.2.2.3.2.2 主張の法を論証するもの [494-517]

2.2.2.2.3.2.3 遍充の論証 [518-519]

2.2.2.2.3.1.4 論証の言葉を述べたもの [520-537]

3 両者の関係

3.1 二無我の一異の在り方 [538-540]

3.2 二無我を説く目的の解説 [541-542]

3.3 二無我が否定するものの認識 [543-545]

3.4 二無我の本質の認識 [546-554]

3.5 二無我の名称の異門の解説 [555-570]

3.6 二無我の空の基盤の本質の認識 [571-581]

3.7 勝義を考察する論理の真実とありのままの顕現の考察 [582-597]

第６章の内容

これらの解析に基づいて内容を簡略にまとめると次のようになる。

1 人無我については、1.1 それに入る在り方[1-8]と 1.2 その論証に分けられ、導入部分としての前者では四顛倒としての我見に言及し、その人は無常で、苦であり、我と作者と矛盾するものであるとする。主要部分である後者では、1.2.1 人無我に入る論理の解説と 1.2.2 その詳細な解説が述べられ、前者では略説として Maitreya の *Mahāyānasūtrālaṃkāra* を引用しながら、1.2.1.1 無常性 [9-126]、1.2.1.2 苦 [127-134]、1.2.1.3 作者の空性 [135-159] が論証される。詳細な解説は、1.2.2.1 解説する理由[160-170]を述べた後に、1.2.2.2 論理そのものの解説として、1.2.2.2.1 根本典籍の配置と、1.2.2.2.2 詳細な解説とに分けられる。前者は、1.2.2.2.1.1 教典の言葉 [171-174]と 1.2.2.2.1.2 マイトレーヤの典籍として *Mahāyānasūtrālaṃkāra* が引用[175-189]され、さらに 1.2.2.2.1.2.2 その詳論では 1.2.2.2.1.2.2.1 人我の実体存在の否定 [190-191]、1.2.2.2.1.2.2.2 我と蘊の一異の否定 [192-195]、1.2.2.2.1.2.2.3 不可言説の人我の否定 [196-199] 、1.2.2.2.1.2.2.4 我が行為をもつことの否定 [200-220]、1.2.2.2.1.2.2.5 聖教との矛盾を説いたもの [220-232]として同論と *Madhyāntavibhāga* が引用される。後者では、1.2.2.2.2.1 有身見の自性の認識 [233-252]、1.2.2.2.2.2 その把握対象としての 1.2.2.2.2.2.1 滅見の外境の否定として、一異 [253-256]、前後 [257-260]、領受者と領受されるもの [261-266]、集まったもの [267-270]、特徴 [271-274] 、区別 [283-285]、業の作者と異熟の受者 [286-287]、部分 [288-291]、遍充されるものと遍充するもの [292-296]、想 [297-299]、三蔵の在り方 [300-307]、ダルマキールティの論理 [308-311]、1.2.2.2.2.2.2 我見を区別した否定 [312-333]が述べられる。ここでは、Nāgārjuna の

Mūlamadhyamakakārikā、Āryadeva の *Catuḥśataka*、Dharmakīrti の *Pramāṇavārttika* などが引用され、最後に 1.3 人無我のまとめ [334-337] が述べられる。

2. 小乗とは共通ではない大乗の法無我に関しては、2.1 法我への執着の認識と、2.2 法無我の論証に分けられ、前者は 2.1.1 名称の異門[338-341]、2.1.2 認識されるものと認識するもの [342]、2.1.3 常と断の二辺の否定[343-353]、2.1.4 有無の区別[354-359]、2.1.5 意味の確定 [360-373]が述べられる。後者は、2.2.1 誓願 [374]に続いて、2.2.2 論証の解説が述べられる。2.2.2.1 事物の真実の非存在の解説 [375-416]では Dharmakīrti の *Pramāṇavārttika* と Śāntideva の *Bodhicaryāvatāra* を引用しながら詳論され、2.2.2.2 戯論の否定 [417-537] では、Asaṅga の *Mahāyānasaṃgraha*、Vasubandhu の *Viṃśatikā*、Nāgārjuna の *Ratnāvalī* を引用しながら解説される。この後者は、意味の否定、相の否定、その両者の否定として詳論されるが、最後の項目では中観派の無自性論証の論理である離一多と四辺生の否定が論じられている。ただしその結びでは *Mahāyāna-sūtrālaṃkāra* が再び引用される。

最後に、3 人無我と法無我の関係が、3.1 両者の一異[538-540]、3.2 説く目的の解説 [541-542]、3.3 両者が否定するものの認識 [543-545]、3.4 両者の本質の認識 [546-554]、3.5 名称の異門[555-570]、3.6 空の基盤の本質[571-581]、3.7 勝義を考察する論理の真実とありのままの顕現の考察 [582-597]として述べられ、第 6 章は結ばれている。

まとめ

以上のことから、本論が依拠した文献に基づいてまとめると、以下のようになる。まず人無我については、Maitreya の *Mahāyānasūtrālaṃkāra* を基軸にして議論が展開する。これは法無我についても同様であり、Tāranātha は二無我を論じるにあたり、同論に基本的に依拠していたことが明らかである。このような在り方は、本論の前章においても同様である。また本章に見られる特徴としては、Dharmakīrti の *Pramāṇavārttika* を引用しており、そこには論証式の支分に関する問題に触れているいる。すなわち Tāranātha はこの論理学的トピックスを認識していることがわかるものの、ここではその話題をさらに議論するまでには至らない。また法無我では、Nāgārjuna の *Mūlamadhyamakakārikā* の冒頭の八不に言及し、中観派の無自性論証である離一多と四辺生の否定が言及される。ただし Kamalaśśīla や Dīpaṃkaraśrījñāna などの中観派のその他の論書へのさらなる言及は見られない。このようなことから、大乗と小乗に共通な人無我と大の法無我の決択については、基本的に瑜伽行唯識派の在り方により解釈し、それを Nāgārjuna の中観の在り方で補足する方法論がとられていると言える。

また他空説の立場からは、如来蔵が人無我を意図したものであり、自性が法無我を意図したものとされる。この二無我に関する論述はチベットにおいては Tsong kha pa

などの著作[7]にも見ることができるが、そこにおいて Candrakīrti などの論書に基づいて論証されている方法論とは異なり、チョナン派独自の解釈スタイルがあるように思える。これについては、チベット仏教における二無我の論証に対する解釈[8]の系譜をより詳細に検討する必要がある。

dBu ma theg mchog 第 6 章和訳

［四］顛倒の他の三つは我見の助伴である。「我は常住である」とか、「(我は)まず存在する」と主張する常［見］や、前に存在した真実とは別に断［見］を考えて人に依存することが、常［見］と断［見］との辺見である。[1-4]

有為は決して常住な状態で存在せず、無常であることから無であり、苦と考察される。苦をともなうものは作者として適切ではなく、無常なるものとして我と作者は矛盾している。[5-8]

そのように、また尊者［マイトレーヤ］が［『大乗荘厳経論』の］偈頌に、

不適切で、原因から生じているからであり、矛盾しているからで、自分自身が存在してないからであり、存在しないからであり、特徴が確実であるからであり、続いて入るからであり、滅しているからであり、[9-12 = MSA 18. 82]

完全に変化するものと把握されているからであり、その原因と結果であるからであり、尽きているからであり、主であるからであり、清浄と衆生が続いて入るからであり、[13-16 = MSA 18. 83]

最初に［生じ］、次第に大きく、拡大し、所依の事物と変異と成熟とそのように劣ったものと特に勝れたものと、[17-20 = MSA 18. 84]

光り輝くものと光り輝かないものと、他の領域に行く者と種子を持つ者と、無種姓の者と、影像として生じたものとで、[21-24 = MSA 18. 85]

生は 14 種であり、原因と量の特殊性と詳細と意味がなく、不適切で、所依としてはあり得ず、[25-28 = MSA 18. 86]

［一時的に］存在するものに［変化が生じることは］あり得ない。最初に滅しなければ、最後に変化しない。そのように劣性と勝れた特殊性と、光り輝くものと光り輝かないものと、[29-32 = MSA 18. 87]

行くことがなければ存続することは不合理で、最後のものはあり得ず、心の随入なので、一切の有為は刹那である。[33-36 MSA 18. 88]

［四］大種と六［内処の］義を刹那と述べたものは、乾燥と拡大と、自性の移動と拡大と減少であるから。[37-40 = MSA 18. 89]

---

[7] ツルティム、高田 1996, pp. 33-83, 片野、ツルティム 1998, pp. 81-191, 小川 1976 などを参照。
[8] 櫻井 2002 を参照。

大種はそれらと結びつくから、転変が根本[9]なので、色彩と香りと味覚と接触が似ているので、それはそれに似ている。[41-44 = MSA 18. 90]

薪に依ってから生じるので、次第に大きくなって認識されるので、心に従って入るので、問うので、それ故に外も刹那である[10]。[45-48 MSA 18. 91]

言う[11]。

何らかのもので、何処にも存在するすることはないものは「常住」とは認められない。虚空と一般的種などを智者[12]が解説しても、論争の本質としてである。[49-52]

変化する事物を断じており、［一般に］知られているからであり、それらは考察されて存在するものであるから、慧による考察だけに尽きている。[53-55]

これらは変化がないから、もし「常ではない」と考えるならば、これに特別な基体は成立せず、変化がなくても、変化がないものではない。[56-59]

基体がないものに、生滅などの有無は何も認められない。「石女の子供に生は存在しない」と言われるように、生は無ではない。[60-63]

「法界は如何なるものでもないということが道理の勝義である」と言われ、それに似ていると認められるものの生がないことは勝義ではなく、これと同じである。[64-67]

存在し、成立しているものに生がなければ、「不生」と述べられる。もとより成立しているのならば、生は存在せず、生じずに、存続し、滅はない。[68-71]

生滅をともなうものに、実体としての存在と考察された存在との二つとして認められている。存在するものには、実体と考察されたものと「勝義」と言われる三種の区別がある。[71-75]

しかも生に続いて存在するならば、存在しており、始めから存在しているものに存在することはない。二つの滅も作られたものになる。これらは新たに生じたものであるから。[76-79]

生じたものに滅がないことは存在しないので、生は滅をともない、有為である。滅は、最初の刹那と第二と劫を経る間なども存在している。[80-83]

得る者とそれは関係しているので時の導きにより変化するものである。

---

[9] 注釈書も、原典である *Mahāyānasūtrālaṃkāra* も「四つ(bzhi)」であるが、テキストは「根本(gzhi)」とある。

[10] 宇井 1961, pp. 462-474.

[11] 以下の偈[49-126]も、1 パーダ 7 音節からなり、引用の可能性もあるが、確認できていない。

[12] 注釈書は、「Dharmakīrti と Dignāga などは、虚空と一般種は常住であるとは解説していないのではないか」とする。

「生起したものも生じたものではない」と考えるのならば、色などもそうなってしまう。[84-87]

「生じても滅しないものがある」と考えるならば、事物は常に存在するものになる。事物が存在しなくても、新たに生じるそれも原因をもつものとなる。[88-91]

「その如くならば、事物と特殊性がないものになる」と考えるならば、法をもつ何らかのものを領受しても、実体として存在せず、特徴の基体の事物は存在しない。[92-95]

依存される本質として有為は特徴をもつものであり、仮設されただけでも除去される本質として生じ、そこに実体として生じることはない。[96-98]

世俗諦としてこれは生じない。実体として生と滅があるものは、有為なる事物としてである。[99-101]

論理と顕現を本質とするそれらに生滅となるものが何から成立しようか。仮設された迷乱の本質を作るので、事物の非存在は原因をともなうと認められる。[102-105]

生滅が存在しても、有為でなければ、大過失になる。有為は自相をともなっていても、「［有為］ではない」と誰が言おう。[106-109]

実体として存在しないものには、領受と倶有［因］がなくても、損失と所作因は存在する。関係因の存在は、あるもの［のみ］である。[110-113]

設定し、作ってから実体として生じるのではなく、仮設された本質として確実に起こされるので、兎の角などの慧の本質にも存在しないものとこれは同じではない。[114-117]

「これは常住である」とは、実体として常住ならば、常住な事物となり、特徴が矛盾している。ではそれは仮設されたものとして常住であるならば、慧の本質として生滅をなすものと矛盾している。[118-121]

何らかの識と考察の行境である一切の有為と、知恵のみの自己の行境である無為で、勝義そのもので、慧の本質の法から解放されている。[122-126]

と言われるものが、剰余の意味の偈頌である。

無常なので、存続する状態はなく、存続の自在性はないので、苦たるものである。道［諦］もすべての苦の種類の中にまとめられる。[127-129]

円満なものが滅し、従順でないものと結合し、原因から結果になり、それも滅する。垢の効力と習気は無から把握し、それから結果が成立し、それも滅するので怖れる。一切の苦は無常であるということは根拠を持っている。[130-134]

「作者が常住で、自在主である」と主張する[13]ならば、苦をともなうので、認められないものに至っているのではないか。結果の時に自ら滅するものは常住ではなく、自在ではない。[135-137]

作られるものと作ることと行為の作者が認められるが、常住で、自在で、一つだけなので、一つの事物をまた作ることができなければ、すべてのものを言うことに何の必要があろうか。作者が常住であるならば、次第により生じることは矛盾する。[138-141]

認められるので次第に起こされるのならば、唯一であることが矛盾する。自在主が認められるものと一つであるならば、多くなってしまう。認めるものが作者と一つであるならば、それも常住になってしまう。[142-144]

異なるものが原因と結果であるならば、無常なものである。多くの原因がさらにまた存在するならば、縁起と同じである。常住な原因と結果であるならば、次第と矛盾する。[145-147]

関係が両者を離れているならば、作者によるのではない。それ故に我は作者の所作を捨てており、苦が自性を捨てることが認められ、我を取るものと認められる。[148-150]

無常は時により導かれ、自在ではない。多くの水滴もそれぞれ地面で乾いてしまえば、川にならず、無常が多く、否定される特徴は決して存在するものではない。[151-154]

> 常住なる自在主が存在せず、それから楽と苦が与えられる境の我も存在しないと考察するならば、三界の煩悩が退けられる[14]。[155-159]

人無我の修習の有無から存在からの解脱の有無が推測される。無明から有身見が［生じ］、それから貪と瞋が強烈に生じる。[160-162]

我見がなければ、他の煩悩が存在しても、また存在を放つ行為の業を集めることはできない。我執と我所執とそれ自身を他に移してから作者と把握する。[163-166]

その特殊性は常住で、一つで、自在をもち、自性は清浄で、善妙で、混ざらないものと認められる。慧が劣った者たちには最初に論理が説かれ、法性とも随順していると認められる。[167-170]

『吉祥な歌』からも、

> 諸蘊に我は存在せず、諸蘊も我に存在しない。考察する通りに、それらは存在せず、それらは存在しないものでもない[15]。[171-174]

---

[13] 注釈書は、カピラのサーンキヤ説に言及する。

[14] この偈も７音節からなり、引用の可能性がある。

[15] 『吉祥な歌(*dpal gyi mgur*)』の確認は現時点で未確認である。

尊者［マイトレーヤ］が偈頌に、我と作者の否定も次のように、

我見の自体は我の特徴ではない。悪いところにとどまるのではなく、特徴は似ていないので、両者と異なるものがないそれは誤って生じたものであり、それ故に解脱は誤りのみに尽きている。[175-179 = MSA 6. 2]

どのようにして迷乱のみに依って人は苦の自性の相続への執着を理解することにはならないのか。知らないものと知っているもの、苦と苦がないもの、法の自性は、その自性ではない。[180-183 = MSA 6. 3]

依ってから事物が生じることに明らかに入るのならば、人はどのように他者の作ったものに依るのか。何故ならば存在するものを見ずに、存在しないものを見るこれに似た闇のこの相は何か[16]。[184-187 = MSA 6. 4]

人は実体として存在する[17]ものではなく、仮説されたものとして存在するものと述べられる。知覚されずに顛倒していることと雑染とが煩悩の原因である。[188-191 = MSA 18. 92]

過失は二つなので、それからこれは、一と異として述べられない。蘊が我になってしまい、それは実体そのものになってしまうから。[192-195 = MSA 18. 93]

特徴と世間において見えるので、論書の門からも、「薪と火のように二として述べられない[18]」ということは不適切であることが認識されるから。[196-199 = MSA 18. 95]

二が存在するという識が生じるので、それは縁ではなく、意味がないから。それ故に見る者から解脱者まで成立しない。[200-203 = MSA 18. 96]

主人そのものが一であるならば、無常であるという認めていないことが生じることをなしておらず、それから特徴[19]を成立させる必要がある。円満な三菩提を損なっている。[204-207 = MSA 18. 97]

三つの過失があるので、見ることなどがその行為として自ら生じたのではない。行為がその縁をともなっても、見ることなどの行為は存在しないものである。[208-211 = MSA 18. 98]

作者ではないので、無常であるので、一つの部分に常に入るので、見ることなどの行為は自ら生じたものとしては適切ではない。[212-215 = MSA 18. 99]

---

[16] 宇井 1961, pp. 105-106.

[17] 注釈書は、外道と声聞 18 部のうちの 5 部に言及する。

[18] 注釈書は、犢子部の「一とも異とも述べられない」という説に言及する。

[19] 注釈書は、サーンキヤとミーマーンサーの人我を知と色形をもつとする説と、ニヤーヤの無生物とする説と、ジャイナの身体の量と同じとする説に言及する。

そのように存続し、滅するものは、以前に存在せず、無常で、第三の方向も存在しないので、縁そのものとしては適切ではない。[216-219 = MSA 18. 100]

雑染と清浄の状態を断じる区別と、入ることと相続の区別も人により近くに説かれている。[220-223 = MSA 18. 102]

人が存在するならば、一切が努力なしに解脱するのか、解脱はないのか[20]。[224-225 = MSA 18. 103cd]

［『中辺分別論』に］

一と因と食者と作者と自在者と主の意味と常住と雑染と清浄の場と、ヨーガ行者と解脱していない解脱者とのこれらを我と見る[21]。[226-231 = MV 3. 15-16ab]

［と］対治を知るものが十説かれている。[232]

この我執の所縁は、自らの相続の五蘊であり、相を我と見ている。迷乱であるから、考察は深くないので、他の相続と相続に属さない場合も、我執の想が生じることがある。蘊は一度、ある時、蘊などと確定しない在り方により入っても見えるものである。[233-239]

我所執も有身見である。最高な識とは別に自と他に相続する。財物などに入っても確定することはない。[240-242]

［我と我所の］それぞれの感受の執着対象である事物は存在しない。洞察されず、世間そのものに合わせて我と主張している。事物の対象にも決して存在せず、真実の世俗のみとして考察されるものが存在するものである。見る者である衆生などもそれに従い、事物と対象に存在するとそれを主張することは迷乱である。[243-248]

顛倒して理解するので、無明は特殊性をもつ。無明は多くのものが追随するので、偉大な知者[22]によっても無明の言説と合わせられている。煩悩を三つにまとめることは前に解説した。[249-252]

ナーガールジュナも、

もし蘊が我であるならば、生と滅をもつものになる。もし諸蘊とは異なるならば、蘊の特徴はないものになる[23]。[253-256 = MMK 18. 1]

もしその天がその人ならば、そのような場合は、常住となる[24]。[257-258 = MMK 27. 15ab]

---

[20] 宇井 1961, pp. 478-488.

[21] 長尾 1976, p. 283.

[22] 注釈書は、「Dharmakīrti など」とする。

[23] *Mūlamadhyamakakārikā* 18. 1. 三枝 1985, pp. 512-513..

もし天とは人は異なるならば、そのような場合は、無常となる[25]。[259-260 = MMK 27. 16ab]

取そのものは我ではない。それは生じ、滅するものである。取は、どのように取者になろう[26]。[261-264 = MMK 27. 6]

我は取とは異なるものとして成立するものではない[27]。[265-266 = MMK 27. 7ab]

人は、地でなく、水でなく、火でなく、風でなく、虚空でなく、識でない。すべてでないならば、それとは別に人は何か[28]。[267-270]

［アーリヤデーヴァの］『［四］百論』にも、

もし内の我が女性でなく、男性でなく、中性でないその時に、何らかの無知から「あなたは主である」と考えている[29]。[271-274 = CŚ 10. 1]

男性は我ではない。女性の姿に似ていないから。女性と中性についても、それに似ていないと知られる。特徴が異なるものに対して事物が一つとは何か。欲望をもつものが我であるならば、執着を離れたものはそれにならない。[275-278]

束縛を我と主張するならば、解脱は［我では］ない。特徴が矛盾しても、［一つ］であるならば、地なども我と［なる］大過失にならないのか。真実であるのならば、種々なることは矛盾する。[279-282]

感受により領受するので領受者の我は存在しない。それが我であるならば、受け取る者の手と行く者の足であり、受け取ることと行くことがなくなってしまう。[283-285]

業は身体と言葉と心で作ることが見られるから。我により作られないで、何故に結果を領受しようか。[286-287]

部分とは別に集まりは存在しないので、身体と言葉と心は決して我ではない。一切が［人我］であるならば、他に依り、無常で、迷乱で、多になるので、我は存在するものではない。[288-291]

遍充の在り方として遍充される［蘊が］一つであるならば、前に解説した過失があり、遍充されるものは一つではない。楽と苦が我により領受されることがなくなってしまう。善と悪など結合しない業果と束縛と解脱などもそこに存在しないことになる。[292-296]

---

[24] 三枝 1985, pp. 918-919.
[25] 三枝 1985, pp. 920-921.
[26] 三枝 1985, pp. 900-901.
[27] 三枝 1985, pp. 902-903.
[28] 注釈書は『宝積経』の『父子相見経(*Pitāputrasamāgamasuutra*)』(Tib. P. 460(16))を指摘するが、確認はできていない。
[29] Lang 1986, p. 95.

ヤジュニャダッタの我が、グナミトラであっても、我の想がヤジュニャダッタに入ることになる。山の想に区別はないように。[297-299]

［三］蔵の在り方[30]からも、

「我」とは魔の心で、あなたが見たものになっている。行蘊はこれを欠いており、ここに衆生は存在しない。[300-303]

例えば支分の集まりに依ってから「車」と述べられるように、そのように諸蘊に依ってから「世俗の衆生」と言われる。[304-307]

最高の他のものを求めるから、生滅の慧をもつものなので、人はこの根などとは我は異なっていることを知る[31]。[308-311 = PV 1. 247cd-248ab]

身体が我であるのならば、それぞれを区別して、心が我である場合も、心と心所に区別される。両者とは別であるならば、外と内に求め、一般的集合だけであるならば、実体として存在しない。[312-315]

我を身体がともなうことは不適切である。特徴と、因果と、所依と能依と、主の関係の何れも成立しない過失をともなっているから。特徴は前に否定した。相互に起こされるものであり、起こされるならば、そのように他に依存することになる。[316-320]

身体が所依であるならば、我は生じ、滅する。我が所依であるならば、身体は常住になってしまう。[321-322]

我と身体が相互に存在する主張する主の関係については、色における我は、内外のすべてを把握しておらず、我に色が存在するならば関係が矛盾する。[323-325]

主により我が作られ、色などの捨取による必要があるならば、その如くではない。［人我は］色ではないから。上下などと場所が一つであることは不適切であるから。草が大地に依る如くではない。[326-329]

そのように増減をなすことなどは知覚されないので、行為も確定しない。外境に［増減が］存在するから。身体と心の一般が我であるならば、不適切である。色と心が一つであることは、その反対で矛盾しているから。[330-333]

その如く人無我である［修習は］大小乗のすべてに存在する。大乗の共通ではない道を修習すべきものが法無我である。[334-337]

法の我執と、事物に執着することと、真実への執着と、事物への執着とは名称の異門である。無への執着は言説への執着だけであり、無への執着は無因により有にまとめられる。[338-341]

有為が本質により存在するならば、「法我」と述べられる。最初のものが第二

---

[30] Tib: sde snod kyi tshul. 典拠の確認はできていない。

[31] 本多 2005, pp. 111-112.

の時に存在するというものが常で、前に真実が存在し、［後に］滅するというものが断と認められる。真実ではない顕現しているだけのものに常と断は存在しない。[342-345]

道理の心の時に世俗を有と見ることが常で、勝義の無と見れば断辺である。無分別に入ることを妨げる場合に有などの論証の考察が常で、否定の考察が断である。[346-349]

否定と論証のすべてが勝義の在り方として存在せず、そのすべてが法の我執の中に収められている。対象として［作者と行為となされるものの］周りの三つの分別はすべてその方向に従うものと知るべきである。 [350-353]

区別すれば、執着の考察と考察しないものとの二つである。第二も執着に結びつくものと結びつかないものの二つ。［十］地を得た執着がないものは［不浄な七地の］動と［清浄な三地の］不動で、それは清浄な地に存在している。執着の考察も、本質の考察と特殊性とまとめたものと区別とが認められる。[354-359]

まとめれば、存続の在り方について、法を有と執着することで、真実として顕現した後に「それに執着する」と言われる。不動な法の考察で顕現しても、真実として顕現は存在しない。顕現しても前の力なので、法我に執着する部分により汚されたと認められる。それ故にこの［世俗の顕現］を捨てれば完全なる仏そのものである。[360-365]

真実としてではなく、幻と把握しても、しばらく否定されない。総じて法を我と見ることは勝義を真実と把握して、禅定の時に捨てられ、他の時ではない。状態に入っているから。[366-369]

世俗を真実と把握することは煩悩の軍隊で、これはそれと矛盾している。清浄など［の善法］を起こし、広げている。知恵の真実を論証するものは法我ではない。その［勝義界］が存在しないと把握するならば、誤った見解そのものである。[370-373]

今度は、論理が少しだけ解説されるべきで、一般性は他の事物に関係せず、何らかに依存する事物とも関係せず、火の一般は火の効果的作用である燃焼のことである。[374-377]

その原因とその結果と特殊性に有益ならば、効果的作用であっても、その［火一般］に存在しないので、効果的作用ではなく、領受されるものでなく、存在するものでなく、考察されたものとは別に見られないので、存在しない。[378-381]

金の瓶に存在する瓶の法は他に行かず、銀などの他の瓶の法はそれにない。それぞれに自らと異なる一般的瓶は存在しない。他の場合も一般性は成立することはないので、存在しない。[382-385]

名称の前に名称の慧は存在しないので、意味がないことなることから、意味が

前に存在し、名称が多いように、意味も多くなり、一つが入ることで、他のものが入らない理由はなく、名称が一つなので、多くの意味も一つになってしまう。[386-390]

前に存在しないならば、色などを見ないことになってしまう。考察されないものの上にも名称を理解することになってしまうので、名称と意味の関係は言説として存在しないものである。[391-393]

論理に自在な［ダルマキールティ］により解説される。

手などが動けば、すべてが動くことになってしまうので、矛盾を有している。行為は一つとして適さないので、他に別なものが成立することになる。[394-397 = PV 1. 84]

一つが覆われれば、すべてのものが覆われることになってしまうのか。覆われないのならば、見えることになり、一つが染料により染められれならば、染められることになってしまうのか。染められないことが考察されるであろう。[398-401 = PV 1. 85]

それ故に集まったものが一つ存在するのではない[32]。[402 = PV 1. 86a]

シャーンティデーヴァも［『入菩提行論』に］、

「相続と積集」と言われるものは、行列と軍隊のように虚妄である[33]。[403-404 = BCA 8. 101ab]

過去の事物が存在するならば、また生じ、さらにまた滅することになる。未来の事物が存在するならば、それは自らの相続が先行するものになり、さらにまた結果が出現し、現在も結果が出現してしまうのか。[405-408]

過去の原因は、火が燃やした種子から芽が生じることになってしまう。未来の結果であるならば、生じ、生まれたものになってしまい、それらは存在しない。顕現として適切でも、認識されないから。過去の色が［現在時に］存在するならば、色としてか、色でないものとして存在する。色ならば、見えることになってしまい、他のものではあり得ない。[409-414]

それ故に一般と粗大の相続と、名称と意味の関係と、［現在と未来の］二時は仮説されただけである。[415-416]

どれほどでも顕現は明らかなので、心である。夢などと同じであるからであり、慧と同時にのみ認識されるので、心は顕現のみで、他に存在しないものと論証される。[417-420]

また聖者［アサンガ］が［『摂大乗論』に］説かれている。

餓鬼と畜生と人と諸天は、例えば種々で、一つの事物に対する意は種々な

---

[32] 本多 2005, pp. 49-50.
[33] 金倉 1965, p. 145.

のであり、対象は成立したものでないと認められている。[421-424 = MS 2. 14b. 1]

対象が対象に成立しているならば、智が無分別にならない。[425-426 = MS 2. 14b. 3ab]

ここに誰かが慧をもち、止を得て、成就して、すべての法を作意し、そのように諸対象が顕現するので、[427-430 = MS 2. 14b. 5]

無分別智の原因にすべての対象の顕現は存在しないので、対象は存在しないと理解すべきである。その如くなので、表象も存在しない[34]。[431-434 = MS 2. 14b. 6]

軌範師［ヴァスバンドゥ］により［『唯識二十論』に］解説されている。

六つが同時に結合するならば、極微は六つの部分になる。六つも同時であるならば、塊も極微のみになる。[435-438 = Vim 12]

それは一つでも対象ではなく、極微としてもそうでなく、それらが集まったものでもない。このように極微は論証されないから[35]。[439-442 = Vim 11]

相の数のように識が存在すると主張するならば、粗大と同じように洞察により滅するであろう。[443-444]

多くの識が一つの本質として真実であるならば、種々なる本質とし顕現する事物は一つであり、事物が一つであることが真実ならば、多くの相が虚妄であり、［種々なる］相が真実ならば、一つの事物を損なわうであろう。[445-448]

聖ナーガールジュナ[36]も［『宝行王正論』に］、

例えば刹那に終わりがあれば、そのように始めと中間が設定されなければならない。そのように刹那が三つに設定されるならば、世間に刹那は存在しない。[449-452 = RĀ 1. 69]

始めと中間と終わりも刹那のように考えるべきである。始めと中間は自と他からでもない[37]。[453-456 = RĀ 1. 70]

識の［刹那の］部分は存在しない。結合を認識するならば、結合に続いて知覚するので、部分がないことと矛盾している。結合しないならば、識と矛盾しており、同一のものに入ることは、入るものとすでに入ったものなので、部分をもっている。[457-460]

無我の証因の最高のものが［一多と四辺生の否定の］二として見える。諸事物

---

[34] 長尾 1982, pp. 319-321.

[35] 梶山 1976, pp. 17-18. ここでは偈の順番が異なっており、後半について注釈書はヴァイシェーシカとニヤーヤの主張に対する反論とする。

[36] 注釈書は、ここで Nāgārjuna の名前の語義解釈をする。

[37] 瓜生津 1974, p. 244.

は本質により成立していない。何故ならば、この法であるものは一と多として成立しないから。そのように証因を根本と合わせてから否定されるべきである。[461-464]

主張命題の法の一の否定方法は前に説いた。多は一と一が集まってから生じたものなので、一がないので多は否定されている。[465-467]

その両者は本質が相互に矛盾するものでもある。多としての顕現は多［の本質として顕現する］ので虚妄である。一ならば、真実が存在しても、一はあり得ない。[468-470]

行境が成立したものに、三蘊が存在するのではない。一でなく、多でないので、虚妄として成立する。遍充を論証する喩例は鏡の影像であり、「自性は存在するものではない。それは鏡とは異ならず、一として成立するものではないから」と否定されている。[471-475]

特徴が同じではないから一でなく、一つの場所に二つは存在しないので、他でもない。この際の真実の非存在の意味は、直接知覚に成立している。それ故に言説の特相により成立していると認められる。[476-479]

「一と多として存在しないならば、実体そのものではない。そこに存在する何れかのものとは別なものは把握されないので、その両者は相互に捨てられて、存在しているから」と言うことで反対の論証が認められている。[480-483]

一と多の関係は無自性により遍充される。影像のように、内外のこの事物も、「その［一と多］と関係するので、それは［自性により］存在しない」と述べられるので、道理を知る推論が生じると認められる。[484-487]

しかもこの教義において対象に依っているので、対象が成立しているのならば、言葉に特殊性はない。二支分と五のいずれかの主張を合わせても適切である[38]。本質を否定する論理の根本がこれである。[488-491]

特殊性を否定するものが四辺の生の否定で、諸事物は生じることはない。自らなどが生じないから。眼などは自らより生じない。存在しているから、生は他の縁に依ることが見えるから。[492-495]

自らによりなすならば、作者は生じないので、存在しておらず、その作者としてどこに相応しようか。自分自身が成立しているならば、生じさせる必要はない。成立していないので、どのように生じさせようか。[496-499]

他からでもない。種子に依るから。それに依らないならば、原因と非因が同じになり、種子を増益する必要がないから。すでに滅したものが他から生じるならば無因になる。[500-503]

---

[38] 論証式の三支作法と五支作法に関する言及であり、注釈書は、「中観は Dharmakīrti により前者を取るが、後者によっても否定できる」とする。

まだ滅していないものから生じるならば、同時で相互性となる。すでに滅したものと滅していないものとは異なる現に滅しつつあるものは存在しないので、それから生じることも適当ではない。他の諸縁から生じたものも作者ではない。[504-507]

その他生の顕現は、考察された本質としてである。芽の時に［種子は］存在しないので、種子は［芽］自身ではない。一つの相続に属しているので、他でもない。種子と芽の有無を相互に洞察されるので、それにも生はない。[508-512]

両者からの生じると主張する場合に、両方の過失がある。青などを否定すれば、多彩さは成立しないように。両者の生は自在なものでなく、依ってから成立する。無因からは決して生じず、全くない。時々生を見て、知られているので、損なわれたものでもある。[513-517]

遍充の論証は、事物として生じるならば、四［辺］に確定する。事物は、自と他と両者により満たされるから。四［辺］から生じないものは、自性により生じることがないものにより満たされる。亀の毛のように、これらの事物も、それは存在しないので、「生じることはない」と言われる。[518-522]

特相を論証する時に、［自性による不生の］意味はすでに成立しているので、それぞれの言説は事物として最高なものと論証されている。相依を論証する論理により遍計［性］は否定されているけれども、事物の本質として洞察すれば、［論理の］力をもつものではない。[523-526]

ある者が「全く存在しないのではない。縁起であるから」と言うこれによりすでに成立したものが論証されていると認められる。有無と生滅の四辺の洞察などを補足する意味は僅かでしかないと知るべきである。[527-530]

「滅と住は存在しない。生が存在しないから」と、「異は成立しない。一が存在しないから」と、「来ることは存在しない。去ることが成立しないから」と、「断は存在しない。常が存在しないから」と［『根本中頌[39]』に］言われる。[531-534]

これらは根本の無上の証因であり、中観の典籍の無限の証因もこれら［四つ］だけに追随しているから。[535-537]

すべての法は二無我であるので、本質の門から区別が存在するものではない。否定される誤った在り方の門から退けらことで区別される。[538-540]

小乗と大乗のそれぞれの種に従って把握されるので、勝者はこの二［無我］を説かれた[40]。[541-542]

この境の否定される事物は［所知に］あり得ない。境をもつものが否定され、

---

[39] 注釈書は、*Mūlamadhyamakakārikā* の帰敬偈を引用する。

[40] 注釈書は、「輪廻からの解脱のために人無我が説かれ、一切智を得るために大乗に法無我が説かれた」とする。

誤った考察であるから顛倒している。事物における有無を誰が否定論証できるのか。[543-545]

真如に世俗の法我は決して存在しない。法我は存在せず、勝義とは別に諸法は自らの本質として始めから成立していないそれも異門である。[546-549]

異門[41]の明らかなものと秘密なすべての法のいかなるものにも、我そのものが決して存在しないそれだけのものに対して「人無我」と言う言説をなし、諸法のすべてをこの二［無我により］に満たしているので、すべての法の一般的特徴である。[550-554]

尊者［マイトレーヤ］によっても、

> 自分と自分の我として存在しないので、自分の本質にどまらないので、執着するままに存在しないので、本質は存在しないと認められる。[555-558 = MSA 11. 50]
>
> 後のものが後のものの所依であるが、本質が存在しないことにより、生じることがなく、滅することがなく、本来より寂静で、自性の涅槃が成立している。[559-562 = MSA 11. 51]
>
> 始めと、真実と、他性と、自らの特徴と、自と他に変わることと、雑染と、特殊性から、生じることのない法に対する忍が解説される[42]。[563-566 = MSA 11. 52]

それらが生じることは決してないことの異門であり、絵の喩例[43]と濁った水の浄化[44]などが、生が真実として存在しないことの異門である。不生の意図もそのように知る必要がある。[567-570]

［如来］蔵の常住は人無我を、すべての相をともなう遍満な自性は法無我の空の基体を意図しており、この［勝義界］は言葉の考察と否定と論証の領域を超えている。[571-574]

一異と生滅の戯論を離れており、それ故に前の論理により否定されない。家の特徴を否定することにより木［が否定されない］ように。[575-577]

二無我の否定方向は勝義の異門だけであり、空の基体［の如来蔵］は勝義のものである。ここに基本と道と結果のいかなる法も存在しない。仏の法身だけが真実として存在する。[578-581]

---

41 B のみ、注釈書に従い「顕現と知られている(snang grags)」と読む。
42 宇井 1961, pp. 228-230.
43 宇井 1961, p. 282.
44 宇井 1961, p. 283.

勝義を洞察するすべての論理の場[45]は、それぞれのものの本質と特殊性などを一と異と洞察したり、矛盾を求めることであるので、洞察の在り方はすべてそれにまとめられる。[582-585]

帰謬派と自立論証派の諸典籍に、真実のそれぞれは存在しない。存在するならば、「このように存在する必要がある」と言うこの秘密の言葉がすべての必要なものに普く合わされる。これを洞察するならば、論理ではないものが多い。[586-589]

作られるものと作ることが真実であることはない。もし真実であるならば、「依存がなく、異なっているだけである」などと言われる。兎の頭に角はない。あるのならば、「白として存在するが、他のものではない」と言うのと同じである。[590-593]

自と他のどちらも認められない事物はあり得ない。それに類似する特徴を設定したものは愚者の道理である。考察された意味を求めるように、すべての顕現を捨ててから、真実の論理の道に入りなさい。[594-597]

と言う「二無我を決択する」と言う第６章

Tibetan Text of the *dBu ma theg mchog*: chapter 6

phyin log gzhan gsum bdag lta'i grogs yin te //
bdag ni rtag tu'am re zhig gnas[46] 'dod rtag /
sngar gnas bden las gzhan du chad snyam pa //
gang zag la ltos rtag chad mthar lta'o //
'dus byas nam yang rtag pa'i go (M. 47) skabs med // 5
mi rtag pa las[47] med dang sdug bsngal rtogs //
sdug[48] bsngal can ni byed por mi rung zhing //
mi rtag pa la bdag dang byed po 'gal //
de ltar yang rje btsun gyis tshigs su bcad pa //[49]

mi rung rgyu las skyes phyir dang //
'gal phyir rang nyid mi gnas phyir // 10
med (L. 27a) phyir mtshan nyid nges phyir dang //
rjes su 'jug phyir 'gag pa'i phyir //[50] [MSA 18. 82]

---

[45] Tib. gnas. ただし、M と注釈は「害(gnad)」と読む。
[46] L: *gnad.*
[47] L: *la.*
[48] L: *rtags.*
[49] L. om. /; M /.
[50] *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 82 (Lévi 1907, p. 149):

yongs su ’gyur bar dmigs phyir dang //
de rgyu nyid dang ’bras bu’i phyir //
zin pa’i phyir dang bdag po’i phyir // 15
dag dang sems can rjes ’jug phyir //[51] [MSA 18. 83]
dang po je bas je che dang //
rgyas dang rten gyi dngos po dang //
’gyur dang yongs su smin pa dang //
de bzhin dman dang khyad par ’phags //[52] 20 [MSA 18. 84]
’od gsal ba dang ’od mi gsal //
yul gzhan ’gro dang sa bon bcas //
sa bon med pa’i ngo bo dang //
gzugs brnyan du ni skye ba ste //[53] [MSA 18. 85]
skye ba rnam pa bcu bzhi la // 25
rgyu dang tshad kyi khyad par dang //
rgyas pa don med mi rung dang //
rten nyid du ni mi srid dang //[54] [MSA 18. 86]
gnas pa la ni mi srid dang //
dang po mi ’jig mthar mi ’gyur // 30
de bzhin dman dang khyad par ’phags //
’od gsal ba dang ’od mi gsal //[55] [MSA 18. 87]
’gro med gnas pa mi rung dang //
tha ma nyid ni[56] mi srid dang //
sems kyi rjes su ’jug pa’i phyir // 35

---

ayogāddhetutotpatter virodhāt svayam asthiteḥ /
abhāvāl lakṣaṇaikāntyād anuvṛtter nirodhataḥ //

51 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 83 (Lévi 1907, p. 149):
parinnāmopalabdheś ca taddhetutvaphalatvataḥ /
upāttatvādhipatvāc ca śuddhasatvānuvṛttitaḥ //

52 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 84 (Lévi 1907, p. 151):
ādyastaratamenāpi cayenāśrayabhāvataḥ /
vikāraparipākābhyāṃ tathā hīnaviśiṣṭataḥ //

53 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 85 (Lévi 1907, p. 151):
bhāsvarābhāsvaratvena deśāntaragamena ca /
sabījābījabhāvena pratibimbena codayaḥ //

54 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 86 (Lévi 1907, p. 151):
caturdaśavidhotpattau hetumānaviśeṣataḥ /
cayāyārthādayogācca āśrayatva asaṃbhavāt //

55 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 87 (Lévi 1907, p. 151):
sthitasyāsaṃbhavādante ādyanāśāvikārataḥ /
tathā hīnaviśiṣṭatve bhāsvarābhāsvare ’pi ca //

56 L: *na.*

’dus byas thams cad skad cig[57] ma //[58] [MSA 18. 88]

’byung ba rnams dang don rnam drug /

skad cig[59] nyid du brjod pa ni //

skam dang ’phel dang rang bzhin gyi //

g-yo (L. 27b) dang[60] ’phel dang ’grib pa’i phyir //[61] 40 [MSA 18. 89]

[20-]’byung ba de-[62] dang ’brel[63] phyir dang //

yongs su ’gyur ba gzhi yi phyir //

kha (D. 18b) dog dri dang ro dang reg /

’dra phyir de ni de dang ’dra //[64] [MSA 18. 90]

bud shing rag[65] las byung ba’i phyir // 45

je[66] bas je[67] cher dmigs pa’i phyir //

sems rjes ’jug phyir dri ba’i phyir //

des na (M. 48) phyi yang skad cig ma[68] //[69] [70] [MSA 18. 91]

smras pa /

gang zhig gang na’ang yod min pa //

rtag ces bya ba mi ’thad do // 50

nam mkha’ dang ni rigs spyi[71] sogs //

mkhas pas (B. 28) bshad kyang rtsod pa’i ngor //

’gyur dngos gcod dang grags phyir yin //

---

[57] L: *gcig.*

[58] *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 88 (Lévi 1907, p. 151):
gatyabhāvātsthitāyogāccaramatva asaṃbhavāt /
anuvṛtteśca cittasya kṣaṇikaṃ sarvasaṃskṛtam //

[59] L: *gcig.*

[60] L: *ba.*

[61] *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 89 (Lévi 1907, p. 153):
bhūtānāṃ ṣaḍvidhārthasya kṣaṇikatvaṃ vidhīyate /
śoṣavṛddheḥ prakṛtyā ca calatvād vṛddhihānitaḥ //

[62] L: *bya byed med.*

[63] L: *’bral.*

[64] *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 90 (Lévi 1907, p. 153):
tatsaṃbhavātpṛthivyāś ca pariṇāmacatuṣṭayāt /
varṇagandharasasparśatulyatvāc ca tathaiva tat //

[65] BM: *rags.*

[66] D: *ji.*

[67] D: *ji.*

[68] D: *mar.*

[69] D. om. *//.*

[70] *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 91 (Lévi 1907, p. 153):
indhanādhīnavṛttitvāt tāratamyopalabdhitaḥ /
cittānuvṛtteḥ pṛcchātaḥ kṣaṇikaṃ bāhyamapyataḥ //

[71] L: *kyi.*

de rnams brtags yod nyid yin phyir //
blo yis brtags pa kho nar zad // 55
’di dag ’gyur ba med pa’i phyir //
rtag[72] pa ci ste min snyam na //
’di la khyad gzhi ma grub pa’i[73] //
’gyur ba med kyang ’gyur med min //
gzhi med pa la skye ’gag sogs // 60
yod med gang yang mi ’thad do //
mo gsham bu la skye ba ni //
med ces bzhin te skye med min //
chos dbyings ci yang ma yin pa[74] //
gnas lugs don dam zhes[75] smra ste // 65
de ’dra ’dod pa’i skye med ni //
don dam min te ’di dang mtshungs //
yod cing grub la skye ba ni //
med na skye med ces[76] brjod bya //
ye nas grub na[77] skye ba med // 70
(L. 28a) ’byung min gnas dang ’gag pa med //
skye ’jig can la rdzas yod dang //
brtags yod gnyis su ’dod pa yin //
gnas pa la ni rdzas dang btags //
don dam zhes bya dbye ba gsum // 75
’on kyang byung rjes gnas na gnas //
gdod mar gnas la gnas pa med //
’gog pa gnyis kyang byas par ’gyur //
’di dag gsar ba[78] skyes phyir ro //
skyes la[79] mi ’gag med pas na // 80
skye ’jig can te ’dus byas yin //
’gog pa skad cig gcig dang gnyis //

---

[72] L: *stag.*
[73] ML: *pas.*
[74] L: *la.*
[75] DL: *ces.*
[76] L: *zhes.*
[77] L: *la.*
[78] L: *pa.*
[79] L: *pa.*

bskal par lon sogs yod pa ste //
thob pa po dang de ’brel phyir //
dus kyi[80] ’khrid pas ’gyur ba nyid // 85
(D. 19a) byung yang skyes pa min snyam na //
gzugs sogs la yang thal bar ’gyur //
skyes kyang mi ’jig srid snyam na //
dngos po rtag pa yod par ’gyur //
dngos med yin[81] yang gsar ba[82] skye // 90
de yang rgyu can nyid ’gyur ro //
de lta na ni (M. 49) dngos po dang //
khyad par med par ’gyur snyam na //
chos can gang la nyer len nam[83] //
rdzas med mtshan gzhi’i[84] dngos med de // 95
bltos[85] ngor ’dus byas mtshan nyid can //
brtags pa tsam yang sel ngor skye //
de la rdzas su skye ba med //
kun rdzob bden par ’di mi skye //
rdzas su (L. 28b) skye ’jig yod pa ni // 100
dngos po ’dus byas rnams[86] la yin //
rig dang snang ngor de dag la //
skye ’jig ’gyur ba gang las ’grub //
brtags pa ’khrul ba’i ngor byas na //
dngos med rgyu dang bcas par ’dod // 105
skye ’jig yod kyang ’dus byas ni //
min na ha cang thal ’gyur te //
’dus byas rang gi mtshan nyid dang //
ldan yang min zhes su zhig smra //
rdzas med la ni nyer len dang // 110
lhan cig byed pa med mod kyang //
nyams par byed dang byed rgyu yod //

---

[80] L: *kyis.*
[81] L: *yig.*
[82] L: *pa.*
[83] L: *dang.*
[84] L: *gzhi.*
[85] BM: *ltos.*
[86] D: *rnams.*

bral ba'i rgyu yod kha cig la'o //
'jog dang byed las rdzas mi skye //
brtags pa'i ngor ni (B. 29) nges bskyed pas // 115
ri bong rwa[87] sogs blo ngo na'ang //
mi srid pa dang 'di mi mtshungs //
'di rtag rdzas su rtag na ni //
rtag pa'i dngos 'gyur mtshan nyid 'gal //
'on de brtags par rtag na ni // 120
blo ngor skye 'jig byed dang 'gal //
gang zhig rnam par shes pa dang //
rtog yul thams cad 'dus byas dang //
ye shes kho na'i rang spyod yul //
'dus ma byas[88] pa don dam nyid // 125
blo ngo'i chos las[89] grol ba'o //
zhes[90] bya ba ni 'phros don gyi tshigs su bcad pa'o //
mi rtag phyir na gnas pa'i go skabs med //
gnas pa'i rang dbang med phyir sdug bsngal (L. 29a) nyid //
lam yang sdug (D. 19b) kun rigs kyi khongs su 'dus //
phun tshogs 'jig dang mi bsrun phrad pa dang // 130
rgyu las 'bras bur 'gyur te de yang 'jig /
dri ma nus dang bag chags med las 'dzin //
de las 'bras 'gyur (M. 50) de yang 'jig pas skrag /
sdug bsngal thams cad mi rtag rgyu mtshan can //
byed po rtag dang dbang bsgyur[91] yin 'dod na // 135
sdug bsngal can phyir mi 'dod bab[92] min nam //
'bras tshe rang 'jig rtag min rang dbang med //
bya byed las kyi byed po 'dod mod kyi //
rtag dbang gcig pus[93] dngos po gcig la yang //
byed mi nus na thams cad smos ci dgos // 140
byed po rtag na rim pas 'byung ba 'gal //

---

87 L: *ra.*
88 L: *byes.*
89 L: *la.*
90 L: *ces.*
91 DM: *sgyur.*
92 L: *pa.*
93 D: *bus*; L: *nus.*

’dod pas rim par bskyed na gcig pus[94] ’gal //
dbang phyug ’dod par gcig na du mar ’gyur //
’dod pa byed por gcig na de yang rtag[95] /
tha dad rgyu ’bras yin na mi rtag nyid // 145
rgyu mang gzhan yang yod na rten ’brel mtshungs //
rtag pa’i rgyu ’bras yin na rim pa ’gal //
’brel ba[96] gnyis dang bral[97] na byed pos min //
de phyir bdag ni byed po’i bya ba ’dor //
sdug bsngal rang bzhin spong ’dod bdag len ’dod // 150
mi rtag dus kyis ’khrid la bdag dbang med //
chu thigs du ma’ang so so’i sar skams na //
chu bor (L. 29b) mi ’gyur mi rtag du ma la //
dgag bya’i mtshan nyid nam yang yod ma yin //
bdag po rang dbang rtag pa med // 155
de las bde sdug sbyin bya’i yul //
bdag kyang med par rtogs pa na //
khams gsum pa yi nyon mongs zlog /[98]
gang zag bdag med sgom pa yod med las //
srid las grol ba yod med rjes su dpog / 160
ma rig pa las ’jig tshogs lta ba ste //
de las ’dod chags zhe sdang shugs drag ’byung //
bdag lta med na nyong mongs gzhan yod kyang //
yang srid ’phen[99] byed las ni gsog[100] mi nus //
ngar ’dzin pa dang nga yir ’dzin pa (D. 20a) dang // 165
de nyid gzhan la spos (B. 30) nas byed por ’dzin //
de yi khyad par rtag gcig rang dbang can //
rang (M. 51) bzhin gtsang bzang ma ’dres pa ru blta //
blo dman rnams la dang por rig[101] pa bstan[102] //

---

[94] L: *nas.*
[95] DM: *brtag.*
[96] L: *pa.*
[97] L: *’bral.*
[98] B: *//*; D: *ī /.*
[99] L: *’phel.*
[100] L: *gson.*
[101] L: *rigs.*
[102] BM: *brtan.*

chos nyid dang yang rjes mthun yin par ’dod // 170

dpal gyi mgur nas kyang //

phung po rnams la bdag med de //

phung po rnams kyang bdag la med //

rnam rtog bzhin du de dag med //

de dag med pa’ang ma yin no //

rje btsun gyis tshigs su bcad pa //

bdag dang byed po ’gog pa yang ’di ltar //[103] 175

bdag tu lta ba’i bdag nyid bdag mtshan min //

ngan par gnas min mtshan (L. 30a) nyid mi ’dra’i phyir //

gnyis las gzhan med de ni nor ba[104] skyes //

de phyir thar ba[105] nor tsam zad pa yin //[106] [MSA 6. 2]

ji ltar ’khrul pa tsam rten[107] skye bo yis // 180

sdug bsngal rang bzhin rgyun chags rtogs mi ’gyur //

rig min rig nyid sdug[108] bsngal sdug bsngal med //

chos kyi rang bzhin de yi rang bzhin min //[109] [MSA 6. 3]

brten[110] nas dngos rab skye ba mngon ’jug na //

skye bo ji ltar gzhan gyi[111] byas la brten[112] // 185

gang phyir yod pa mi mthong med mthong ba //

’di ’dra’i mun nag rnam pa ’di gang zhig /[113] [MSA 6. 4]

gang zag rdzas su yod ma yin //

brtags par yod pa nyid du brjod //

mi dmigs phyin ci log pa dang // 190

---

[103] ９音節からなるが、続いて引用される MSA の偈ではない。

[104] L: *pa.*

[105] L: *pa.*

[106] *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 6. 2 (Lévi 1907, p. 22):
na cātmadṛṣṭiḥ svayamātmalakṣaṇā na cāpi duḥsaṃsthitatā vilakṣaṇā /
dvayānna cānyad bhrama eṣataditastataś ca mokṣo bhramamātrasaṃkṣayaḥ //

[107] M: *brten.*

[108] D: *sdig.*

[109] *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 6. 3 (Lévi 1907, p. 23):
kathaṃ jano vibhramamātramāśritaḥ paraiti duḥkhaprakṛtiṃ na saṃtatām /
avedako vedaka eva duḥkhito na duḥkhito dharmamayo na tanmayaḥ //

[110] DL: *rten.*

[111] L: *gyis.*

[112] DL: *rten.*

[113] *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 6. 4 (Lévi 1907, p. 23):
pratītyabhāvaprabhave kathaṃ janaḥ samakṣavṛttiḥ śrayate ’nyakāritam /
tamaḥ prakāraḥ katamo ’yamīdṛśo yato ’vipaśyansadasannirīkṣate //

kun nas nyon mongs nyon mongs rgyu //[114] [MSA 18. 92]
nyes pa gnyis phyir de las ’di //
gcig dang gzhan du brjod bya min //
phung po bdag tu thal ba dang //
de rdzas nyid du thal ’gyur phyir //[115] 195 [MSA 18. 93]
mtshan nyid dang ni ’jig rten na //
mthong phyir bstan bcos sgo nas kyang //
bud shing me bzhin gnyis su ni //
brjod min mi rung dmigs phyir ro //[116] [MSA 18. 95]
gnyis yod rnam shes skye ba’i phyir // 200
de rkyen ma yin don med phyir //
de phyir lta ba po nas ni //
grol ba’i bar du mi ’gyur ro //[117] [MSA 18. 96]
bdag po nyid gcig yin na ni //
mi rtag (L. 30b) mi ’dod ’byung mi byed // 205
(M. 52) de las (D. 20b) mtshan nyid sgrub dgos te //
rdzogs pa’i byang chub gsum la gnod //[118] [MSA 18. 97]
nyes pa gsum phyir lta sogs la //
de yi byed par rang byung min //
byed pa de yi rkyen can yang // 210
lta sogs byed pa med pa yin //[119] [MSA 18. 98]
byed po min phyir mi rtag phyir //
gcig char rtag tu ’jug pa’i phyir //

---

114 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 92 (Lévi 1907, p. 154):
prajñaptyastitayā vācyaḥ pudgalo dravyato na tu /
nopalambhādviparyāsāt saṃkleśāt kliṣṭahetutaḥ //

115 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 93 (Lévi 1907, p. 154):
ekatvānyatvatovācyas tasmād doṣadvayādasau /
skandhātmatvaprasaṅgāc ca tad dravyatvaprasaṅgataḥ //

116 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 95 (Lévi 1907, p. 155):
lakṣaṇāl lokadṛṣṭāc ca śāstrato ’pi na yujyate /
indhanāgnyoravācyatv amupalabdher dvayena hi //

117 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 96 (Lévi 1907, p. 155):
dvaye sati ca vijñānasaṃbhavātpratyayo na saḥ /
nairarthakyādato draṣṭā yāvanmoktā na yujyate //

118 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 97 (Lévi 1907, p. 155):
svāmitve sati cānityamaniṣṭaṃ na pravartayet /
tat karmalakṣaṇaṃ sādhyaṃ saṃbodho bādhyate tridhā //

119 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 98 (Lévi 1907, p. 155):
darśanādau ca tadyatnaḥ svayaṃbhūrna trayād api /
tad yatnapratyayatvaṃ ca niryatnaṃ darśanādikaṃ //

lta la sogs pa byed pa ni //
rang byung nyid du mi rung ngo //[120] 215 [MSA 18. 99]
de bzhin gnas dang zhig pa ni //
snga na med dang mi rtag dang //
phyogs gsum pa yang med pa'i phyir //
rkyen nyid du ni mi rung ngo //[121] [MSA 18. 100]
kun nas nyon mongs rnam byang ba'i // 220
gnas skabs gcod pa'i bye brag dang //
'jug dang rgyun gyi bye brag kyang //
gang zag gis ni nye bar bstan //[122] [MSA 18. 102]
(B. 31) gang zag yod na thams cad ni //
'bad med thar pa'am[123] thar ba[124] med //[125] 225 [MSA 18. 103cd]
gcig dang rgyu dang za ba dang //
byed pa dang ni dbang bsgyur[126] dang //
bdag po'i don dang rtag pa dang //
nyon mongs pa dang dag pa'i gnas // [MV 3. 15]
rnal 'byor can dang ma grol grol // 230
'di dag la ni bdag tu lta //[127] [MV 3. 16ab]
gnyen por mkhas pa bcu gsungs so //
bdag 'dzin 'di yi dmigs pa rang rgyud kyi //
phung po lnga yin rnam pa bdag tu lta //
'khrul phyir rnam rtog gting tshugs ma yin (L. 21a) pas // 235

---

120 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 99 (Lévi 1907, p. 155):
akartṛtvād anityatvāt sakṛtrityapravṛttitaḥ /
darśanādiṣu yatnasya svayaṃbhūtvaṃ na yujyate //

121 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 100 (Lévi 1907, p. 155):
tathā sthitasya naṣṭasya prāgabhāvād anityataḥ /
tṛtīyapakṣābhāvāc ca pratyayatvaṃ na yujyate //

122 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 102 (Lévi 1907, p. 155):
saṃkleśavyavadāne ca avasthācchedabhinnake /
vṛttisaṃtānabhedo hi pudgalenopadarśitaḥ //

123 B: *ba'am.*

124 L: *pa.*

125 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 18. 103cd (Lévi 1907, p. 155):
ayatnamokṣaḥ sarveṣāṃ na mokṣaḥ pudgalo 'sti vā //

126 DL: *sgyur.*

127 *Madhyāntavibhāgakārikā* 3. 15-16ab (Nagao 1964, p. 44):
ekahetutvabhoktṛtvakartṛtvavaśavartane /
ādhipatyārthanityatve kleśaśuddhyāśraye 'pi ca //
yogitvāmuktamuktatve ātmadarśanameṣu hi /

gzhan gyi rgyud dang rgyud mi gtogs pa la'ang //
bdag tu 'dzin pa'i 'du shes skye ba srid //
phung po ris[128] gcig res 'ga' lnga la sogs //
nges med tshul gyis 'jug pa'ang mthong ba yin //
bdag gir 'dzin pa'ang 'jig tshogs lta ba ste // 240
gtso bo[129] rnam shes las gzhan rang gzhan rgyud //
yo byad[130] sogs la 'jug mod nges pa med //
de de'i 'dzin stangs zhen yul dngos mi srid //
ma dpyad 'jig rten ngor bstun gang zag 'dod //
dngos po'i don du nam yang yod ma yin // 245
yang dag kun rdzob tsam du brtags (M. 53) yod nyid //
mthong bo[131] sems can sogs kyang de dang mthun //
dngos dang don du yod (D. 21a) par de 'dod 'khrul //
log par rig pas ma rig khyad par can //
ma rig du ma rjes su 'brel ba'i phyir // 250
blo chen 'gas kyang ma rig tha snyad sbyar //
nyon mongs gsum du bsdu bar sngar bshad zin //

klu sgrub kyis kyang[132] /

gal te phung po bdag yin na //
skye dang 'jig pa can du 'gyur //
gal te phung po rnams las gzhan // 255
phung po'i mtshan nyid med par 'gyur //[133] [MMK 18. 1]
gal te lha de mi de na //
de lta na ni rtag par 'gyur //[134] [MMK 27. 15ab]
gal te lha las mi gzhan na //
de lta na ni mi rtag 'gyur //[135] 260 [MMK 27. 16ab]

---

128 L: *res.*
129 LM: *bor.*
130 L: *byed.*
131 L: *ngo.*
132 L: *yang.*
133 *Mūlamadhyamakakārikā* 18. 1 (三枝 1985, p. 512):
ātmā skandhā yadi bhavedudayavyayadbhāgbhavet /
skandhebhyo 'nyo yadi bhavedbhavedaskandhalakṣaṇaḥ //
134 *Mūlamadhyamakakārikā* 27. 15ab (三枝 1985, p. 918):
sa devaḥ sa manuṣyaścedevaṃ bhavati śāśvatam //
135 *Mūlamadhyamakakārikā* 27. 16ab (三枝 1985, p. 920):
devādanyo manuṣyaścedaśāśvatamato bhavet /

(L. 31b) nye bar len nyid bdag ma yin //
de dag ’byung dang ’jig pa yin //
nye bar blangs pa ci[136] lta bur //[137]
nye bar len po yin par ’gyur //[138] [MMK 27. 6]
bdag ni nye bar len pa las // 265
gzhan du ’thad pa nyid ma yin //[139] [MMK 27. 7ab]
skyes bu sa min chu ma yin //
me min rlung min nam mkha’ min //
rnam shes ma yin kun min na //
de las gzhan na[140] skyes bu gang // 270
brgya ba[141] las kyang //
gal te nang bdag bud med min //
skyes min ma ning ma yin pa //
de tshe mi shes ’ba’ zhig las //
khyod bdag po’o snyam[142] du sems //[143] [CŚ 10. 1]
skyes pa bdag min mo gzugs mi ’dra’i phyir // 275
bud med ma ning la yang de ’drar shes //
mtshan nyid ’gal la dngos po gcig pa ci //
’dod ldan bdag na chags bral der mi ’gyur //
bcings[144] ba[145] bdag ’dod na ni grol ba min //
mtshan nyid (B. 32) ’gal yang yin na sa sogs kyang // 280
bdag tu ha cang thal ba ma yin nam //
de kho na nyid yin na sna tshogs ’gal //
tshor bas myong phyir myong bo[146] bdag yod min //

---

136 L: *ji*.
137 L: ⁄.
138 *Mūlamadhyamakakārikā* 27. 6 (三枝 1985, p. 900):
na copādānamevātmā vyeti tatsamudeti ca /
kathaṃ hi nāmopādānamutpādātā bhaviṣyati //
139 *Mūlamadhyamakakārikā* 27. 7ab (L omits these pādas) (三枝 1985, p. 902):
anyaḥ punarupādānādātmā naivopapadyate /
140 LM: *don*.
141 LM *pa*.
142 D: *rnam*.
143 *Catuḥśataka* 10. 1 (Lang 1986, p. 94):
antarātmā yadā na strī na pumān na napuṃsakam /
tadā kevalam ajñānād bhāvas te ’haṃ pumān iti //
144 M: *bcing*.
145 L: *pa*.
146 L: *po*.

de bdag yin na len po lag pa dang //
’gro bo[147] rkang yin de ni len ’gro med // 285
las ni lus ngag sems (M. 54) pas[148] byed mthong phyir //
bdag gis ma byas ci phyir ’bras bu myong //
cha shas las gzhan tshogs pa med pa’i phyir //
lus ngag sems ni nam yang bdag ma yin //
(L. 32a) thams cad yin na gzhan dbang mi rtag ’khrul // 290
du mar (D. 21b) ’gyur phyir bdag ni yod ma yin //
khyab pa’i tshul la khyab byar gcig yin na //
sngar bshad skyon dang khyab byar mi gcig na //
bde sdug bdag gis myong ba med par ’gyur //
dge sdig[149] sogs dang ma ’brel las ’bras dang // 295
bcings grol sogs kyang de la[150] med par ’gyur //
mchod sbyin bdag ni[151] yon tan bshes gnyen yang //
bdag gi ’du shes mchod sbyin la ’jug ’gyur //
ri bo’i ’du shes bye brag med pa bzhin //
sde snod kyi tshul las kyang /[152]
bdag ces[153] bya ba bdud kyi sems // 300
khyod ni lta bar gyur pa yin //
’du byed phung po ’dis stong ste //
’di la sems can yod ma yin //
ji ltar yan lag tshogs rnams la //
rten[154] nas shing rtar brjod pa ltar // 305
de bzhin phung po rnams brten nas //
kun rdzob sems can zhes bya’o //
mchog gzhan don du gnyer phyir dang //
skye ’jig blo can nyid kyi phyir //
skye bos ’di yi dbang sogs las // 310
bdag ni tha dad gyur par shes //[155]

---

147 L: *po.*
148 L: *las.*
149 BDM: *sdug.*
150 L: *ma.*
151 LM: *na.*
152 DL: *//.*
153 D: *zhes.*
154 M: *brten.*

lus bdag yin na so sor phye ba dang //
sems bdag yin na'ang sems dang sems byung dbye //
gnyis ka las gzhan yin na phyi nang tshol //
tshogs (L. 32b) spyi tsam zhig yin na rdzas su med // 315
bdag la lus ldan mi rung mtshan nyid dang //
rgyu 'bras rten dang brten pa bdag po'i 'brel //
gang yang 'thad pa ma yin skyon bcas phyir //
mtshan nyid sngar bkag phan tshun bskyed pa yin //
bskyed na mi rtag de bzhin gzhan ltos[156] 'gyur // 320
lus rten yin na bdag ni skye dang (M. 55) 'jig /
bdag rten yin na lus ni rtag par thal //
bdag lus phan tshun yod 'dod bdag po'i 'brel //
gzugs la bdag ni phyi nang kun ma dmigs //
bdag la gzugs gnas na ni 'brel[157] ba 'gal // 325
bdag gis bdag byas gzugs sogs 'dor[158] len dbang //
dgos na de ltar min no (D. 22a) gzugs min phyir //
bla 'og sogs dang gnas gcig rung ma yin //
rtswa[159] shing sa la rten[160] ltar ma yin te //
de bzhin 'phel 'grib (B. 33) byed sogs ma dmigs phyir // 330
byed kyang ma nges phyi[161] rol la yod phyir //
lus sems spyi bo bdag na'ang mi rung ste //
gzugs sems gcig yin cig shos 'gal phyir ro //
de ltar gang zag bdag med do //
theg pa che chung kun la yod // 335
theg chen thun mong min lam du //
bsgom[162] bya chos kyi bdag med do //
chos kyi bdag 'dzin dngos (L. 33a) por zhen pa dang //
bden 'dzin dngos 'dzin ming gi rnam grangs so //

---

155 *Pramāṇavārttika* 1. 247cd-248ab (Miyasaka 1972, p. 34):
parāparaprārthanāto vināśotpattibuddhitaḥ //
indriyādeḥ pṛthag bhūtam ātmānaṃ vetty ayaṃ janaḥ /
156 DL: *bltos.*
157 M: *'bral.*
158 M: *'dir.*
159 L: *rtsa.*
160 M: *brten.*
161 L: *phyir.*
162 DL: *sgom.*

med ’dzin tha snyad ’dzin pa tsam yin te // 340
med la ’dzin rgyu med pas yod par ’dus //
’dus byas ngo bos yod na chos bdag brjod //
dang po gnyis pa’i dus gnas rtag pa’i ste[163] //
sngar ni bden yod ’gag pa chad par ’dod //
bden min snang ba tsam la rtag chad med // 345
gnas lugs sems dus kun rdzob yod lta rtag /
don dam med par lta na chad pa’i mtha’ //
rnam par mi rtog la ’jug gegs kyi skabs //
yod sogs sgrub rtog rtag dang dgag rtog chad //
dgag sgrub thams cad don dam tshul la med // 350
de kun chos kyi bdag ’dzin khongs su ’dus //
don du ’khor gsum rnam par rtog pa kun //
de yi phyogs mthun nyid du shes par bya //
dbye na zhen pa’i rtog dang mi rtog gnyis //
gnyis pa’ang zhen par ’brel dang ma ’brel (M. 56) gnyis // 355
sa thob zhen med g-yo dang mi g-yo ste //
de ni dag pa’i sa na yod pa yin //
zhen rtog de yang ngo bo nyid rtog dang //
khyad par dang ni bsdus dang dbye bar ’dod //
mdor na gnas tshul la ni chos yod ’dzin // 360
bden par snang phyin de la ’dzin zhes bya //
chos rtog mi (L. 33b) g-yo snang yang bden snang med //
snang ba’ang snga ma’i mthu yin de phyir te[164] //
(D. 22b) chos bdag ’dzin pa’i cha shas bsgos par ’dod //
de phyir ’di spangs rdzogs na sangs rgyas nyid // 365
bden par ma yin sgyu mar ’dzin pa yang //
re zhig mi dgag spyir ni chos bdag lta //
don dam bden ’dzin mnyam bzhag[165] dus na spangs //
gzhan du ma yin gnas tshul la zhugs phyir //
kun rdzob bden par ’dzin pa nyon mongs dpung // 370
’di ni der ’gal dang[166] sogs bskyed cing ’phel //

---

[163] L: *sde.*
[164] L: *de.*
[165] LM: *gzhag.*

ye shes bden grub chos kyi bdag ma yin //
de ni med par ’dzin na log lta nyid //
da ni rigs pa cung zad bshad bya ste //
spyi rnams dngos po gzhan la ma ’brel zhing // 375
gang la rten dngos dang yang ma ’brel la //
me[167] spyis me yi don byed bsreg pa’am //
de rgyu de ’bras khyad par la phan na //
don nus yin yang de la med pas na //
don byed nus min myong min gnas med pa // 380
(B. 34) brtag[168] pa las gzhan ma mthong de phyir med //
gser bum la gnas bum chos gzhan mi ’gro //
dngul sogs gzhan gyi bum chos de la min //
re rer rang rang las gzhan spyi bum med //
log[169] na’ang spyi ni grub pa med phyir med // 385
ming gi snga rol ming (L. 34a) gi blo med pas //
don med ’gyur las don ni sngar yod dang //
ming mang bzhin du don yang mang ’gyur dang //
gcig ’jug gzhan mi ’jug pa’i rgyu med dang //
ming gcig phyir na don mang gcig tu (M. 57) ’gyur // 390
sngar med na ni gzugs sogs mthong min ’gyur //
ma brtags[170] gong du’ang ming[171] blor thal ’gyur bas //
ming don ’brel med brjod du med pa yin //

rigs pa’i dbang phyug gis bshad pa //

lag sogs g-yo na thams cad dag /
g-yo bar ’gyur phyir ’gal ba can // 395
las ni gcig tu mi rung phyir //
gzhan du tha dad grub par ’gyur //[172] [PV 1. 84]
gcig bsgribs pa na thams cad dag /

---

166 M: *dad.*
167 L: *mi.*
168 L: *brtags.*
169 L: *logs.*
170 L: *brtag.*
171 L: *mi.*
172 *Pramāṇavārttika* 1. 84 (Miyasaka 1972, p. 14):
pāṇyādikampe sarvasya kampaprāpter virodhinaḥ /
ekasmin karmaṇo ’yogāt syāt pṛthak siddhir anyathā //

sgrib par (D. 23a) 'gyur ba'am ma bsgribs[173] na //
mthong 'gyur[174] gcig tshon gyis bsgyur[175] na // 400
bsgyur ba'am ma bsgyur rtogs par 'gyur //[176] [PV 1. 85]
de phyir tshogs pa gcig yod min //[177] [PV 1. 86a]
zhi ba lhas kyang /[178]
rgyud[179] dang tshogs zhes bya ba ni //
'pheng ba dmag la sogs bzhin brdzun[180] //[181] [BCA 8. 101ab]
'das pa'i dngos yod na ni yang skye[182] dang // 405
slar yang 'jig 'gyur ma 'ongs[183] dngos yod na //
de ni rang rgyu sngon song yin par 'gyur //
slar yang 'bras 'byin da lta'ang 'bras 'byin nam[184] //
'das pa rgyu ni[185] mes tshig[186] sa bon las //
myu gur thal 'gyur ma 'ongs 'bras yin na // 410
byung dang[187] skyes par thal te de dag (L. 34b) med //
snang du rung yang dmigs pa min phyir ro //
gzugs 'das yod na gzugs sam gzugs min yod //
gzugs na mthong 'gyur gzhan na srid min no //
de phyir spyi dang rags pa rgyun dag dang // 415
ming don 'brel dang dus gnyis brtags pa tsam //
ci[188] tsam snang ba gsal bas sems yin te //
rmi lam la sogs dag dang mtshungs phyir dang //

---

173 M: *bsgrib.*
174 L: *gyur.*
175 L: *bskur.*
176 *Pramāṇavārttika* 1. 85 (Miyasaka 1972, p. 14):
ekasya cāvṛttau sarvasyāvṛttiḥ syād anāvṛttau /
dṛśyeta rakte caikasmin rāgo 'raktasya vā gatiḥ //
177 *Pramāṇavārttika* 1. 86a (Miyasaka 1972, p. 14):
nasty ekasamudāyo 'smād
178 D: *//.*
179 DL: *rgyud.*
180 B: *rdzun.*
181 *Bodhicaryāvatāra* 8. 101ab (Bhattacharya 1960, p. 162):
saṃtānaḥ samudāyaś ca paṅktisenādivanmṛṣā /
182 M: *skyed.*
183 D: *'ong.*
184 L: *na.*
185 LM: *na.*
186 L: *tshigs.*
187 L: *ba.*
188 L: *ji.*

blo dang lhan cig kho nar dmigs pas kyang //

sems snang tsam yin gzhan du med par grub // 420

yang 'phags pas gsungs pa /[189]

yi dwags dud 'gro mi rnams dang //

lha rnams ji ltar rigs rigs su //

dngos gcig yid ni tha dad (M. 58) phyir //

don ma grub par 'dod pa yin // [MS 2. 14b. 1]

don ni don du grub gyur na // 425

shes pa rtogs[190] pa med mi 'gyur // [MS 2. 14b 3ab]

'di la su zhig blo ldan zhing //

zhi ba thob pa grub pa yi //

chos kun yid la byed pa la //

de ltar don rnams snang phyir dang // 430 [MS 2. 14b. 5]

mi rtog ye shes rgyu ba la //

don kun snang ba (B. 35) med phyir yang //

don med khong du chud par bya //

de lta bas na rnam rig med // [MS 2. 14b. 6]

slob dpon gyis bshad[191] //

drug gis[192] gcig char sbyar ba na // 435

phra rab rdul[193] cha drug tu 'gyur //

drug po dag (D. 23b) kyang go gcig na //

(L. 35a) gong bu'ang rdul phra[194] tsam du 'gyur //[195] [Vim 12]

de ni gcig na'ang yul min la //

phra rab rdul du du ma'ang min // 440

de dag 'dus pa'ang ma yin te //

'di ltar rdul phra[196] mi 'grub phyir //[197] [Vim 11]

---

189 D: //.

190 BL: *rtog*.

191 M: *bshad pa*.

192 D: *gi*.

193 D: *rtul*.

194 DL: *phran*.

195 *Viṃśatikā* 12 (Lévi 1925, p. 7):
yad kena yugapadyogāt paramāṇoḥ ṣaḍaṃṣatā /
ṣaṇāṃ samānadeśatvāt piṇḍaḥ syādannumātrakaḥ //

196 L: *phran*.

197 *Viṃśatikā* 11 (Lévi 1925, p. 6):
na tad ekaṃ na cānekaṃ viṣayaḥ paramāṇuśaḥ /
na ca te saṃhatā yasmāt paramāṇurna siṣyati //

rnam pa'i grangs bzhin shes pa yod 'dod na //
rags pa bzhin du dpyad pas 'jig par 'gyur //
du ma shes pa gcig gi ngor bden na // 445
sna tshogs ngo bor snang ba'i dngos gcig la //
dngos gcig bden na rnam pa mang po brdzun[198] //
rnam pa bden na dngos gcig nyams par 'gyur //
'phags pa nā ga rdzu[199] nas kyang //
ji ltar skad cig mtha' yod pa //
de bzhin thog dang dbus brtag[200] dgos // 450
de ltar skad cig gsumb rtog[201] phyir //
'jig rten skad cig gnas pa min // [RĀ 1. 69]
thog ma dbus dang tha ma yang //
skad cig bzhin du bsam par bya //
thog ma dbus dang tha ma dag / 455
rang gzhan[202] las kyang ma yin no //[203] [RĀ 1. 70]
shes pa cha med yul phrad shes na ni //
phrad[204] rjes[205] rigs[206] pas cha med 'gal ba yin //
ma phrad shes par 'gal la gcig par zhugs //
'jug dang zhugs zin phyir na cha bcas so // 460
bdag med gtan tshigs gtso bo gnyis su mthong //
dngos (L. 35b) rnams ngo bos ma grub gang phyir 'di //
chos yin gcig dang du mar ma (M. 59) grub phyir
de ltar gtan tshigs[207] rtsa sbyor 'god bya ste //
phyogs chos gcig 'gog[208] tshul rnams[209] sngar bstan zin // 465

---

198 B: *rdzun.*
199 M: *gardzu.*
200 D: *rtag*; L: *rtog.*
201 DL: *rtag.*
202 D: *bzhin.*
203 *Ratnāvalī* 1. 69-70 (Hahn 1982, pp. 28-29):
yathānto 'sti kṣaṇasyaivam ādimadhyaṃ ca kalpyatām /
tryātmakatvāt kṣaṇasyaivaṃ na lokasya kṣaṇaṃ sthitiḥ //
ādimadhyāvasānāni cintyāni kṣaṇavat punaḥ /
ādimadhyāvasānatvaṃ na svataḥ parato 'pi vā //
204 B: *'phrad.*
205 L: *zhes.*
206 B: *rig.*
207 D: tshig.
208 L: om.
209 L: *rnams na.*

du ma gcig gcig bsags las byung ba'i phyir //
gcig med phyir na du ma khegs pa yin //
de gnyis ngo bo phan tshun 'gal ba'ang ste //
du mar snang ba du ma'i phyir na brdzun[210] //
gcig na bden pa srid kyang gcig mi srid // 470
spyod yul gyur la phung gsum yod ma yin //
gcig min du ma min pas brdzun[211] par grub //
khyab sgrub dpe[212] ni me long gzugs brnyen[213] te //
rang bzhin yod min[214] de ni me long las //
gzhan min gcig tu grub min phyir zhes[215] 'god // 475
mtshan nyid mi mtshungs phyir na[216] gcig pa min //
gcig gi go sar gnyis med phyir gzhan med //
skabs 'di'i bden med don ni mngon sum grub //
(D. 24a) de phyir tha snyad rtags kyis sgrub par 'dod //
gcig dang du mar med na rdzas dngos min // 480
der yod gang rung las gzhan ma dmigs phyir //
de gnyis phan tshun spangs te gnas phyir ro //
zhes pas ldog pa sgrub par 'dod pa yin //
gcig dang (B. 36) du bral rang bzhin med pas khyab //
gzugs brnyan bzhin te phyi nang dngos 'di yang // 485
(L. 36a) de dang bral phyir de med ces[217] bkod pas //
rigs[218] shes rjes dpag bskyed par 'dod pa yin //
'on kyang lugs 'dir[219] don la rton[220] pa'i phyir //
don grub na ni tshig la khyad par med //
yan lag gnyis lnga ci 'dod sbyor du rung // 490
ngo bo 'gog pa rigs[221] pa'i rtsa ba 'di'o //

---

210 BD: *rdzun.*
211 B: *rdzun.*
212 D: *des.*
213 M: *brnyan.*
214 L: *med.*
215 D: *ces.*
216 D: *ni.*
217 D: *zhes.*
218 LM: *rig.*
219 DM: *'di.*
220 M: *ston.*
221 D: *rig.*

khyad par ’gog pa mtha’ bzhi skye ’gog ste //
dngos rnams skye med bdag sogs mi skye’i phyir //
mig sogs bdag las mi skye yod phyir dang //
skye ba rkyen gzhan la ltos[222] mthong phyir ro // 495
bdag gis byed na byed po ma skyes pas //
med phyir de yis[223] byed pa ga la (M. 60) rung //
rang nyid grub na skyed[224] byed dgos pa med //
ma grub pas ni ji ltar bskyed par byed //
gzhan las min te sa bon la ltos[225] phyir // 500
de mi ltos[226] na rgyu dang rgyu min pa //
mnyam gyur sa bon la phan mi dgos phyir //
zhig zin gzhan las skye na rgyu med ’gyur //
ma zhig las skyes dus mnyam phan tshun nyid //
’gags dang ma ’gags[227] las gzhan ’gag[228] bzhin pa // 505
med phyir de las skyes pa’ang[229] mi rung ngo //
rkyen gzhan rnams las[230] byung yang byed po min //
gzhan skyes[231] snang ba de ni brtags ngor yin //
myu gu’i dus na med phyir sa bon te[232] //
rang min rgyud gcig (L. 36b) gtogs phyir gzhan yang min // 510
sa bon myu gu yod med phan tshun du //
rnam par dpyad pas de la’ang[233] skye ba med //
gnyis skye ’dod la gnyis ka’i skyon yin te //
sngo sogs bkag na khra bo mi ’grub bzhin //
(D. 24b) gnyis skye[234] rang dbang ma yin ltos[235] las grub // 515
rgyu med nam yang skye dang nam yang min //

---

222 DL: *bltos.*
223 L: *yi.*
224 DM: *bskyed.*
225 DL: *bltos.*
226 DL: *bltos.*
227 BM: *’gag.*
228 D: *’gags.*
229 L: *skye ba’ang.*
230 L: *la.*
231 BL: *skye.*
232 L: *de.*
233 L: *lang.*
234 L: *skyes.*
235 D: *bltos.*

res ’ga’ skye mthong grags pas gnod pa’ang yin //
khyab sgrub dngos por skye na de bzhir nges //
dngos la rang gzhan gnyis kyis khyab phyir ro //
bzhi las mi skye rang bzhin skye med khyab // 520
rus spal spu bzhin dngos po ’di dag kyang //
de med phyir na skye ba med ces[236] bya //
rtags grub dus na don ni grub zin pas //
de de’i tha snyad dngos su gtso bor bsgrub //
ltos[237] grub rigs pas kun brtags khegs mod kyang // 525
dngos po’i ngo bor dpyod na stobs ldan min //
kha cig gtan med min te rten ’brel phyir //
zer ba ’dis ni grub zin bsgrub[238] par ’dod //
yod med skye ’gog mu bzhi dpyod pa sogs //
’phros don phra mo yin par shes par bya // 530
’gag gnas med de[239] skye ba med (M. 61) phyir dang //
tha dad min te gcig pa med phyir dang //
’ong ba med de song ba ma grub dang //
chad pa med de rtag pa (B. 37) med phyir zhes //
(L. 37a) ’di rnams rtsa ba’i gtan tshigs bla na med // 535
dbu ma’i gzhung gi gtan tshigs mtha’ dag kyang //
’di rnams kho na’i rjes ’brang yin phyir ro //
chos kun bdag med gnyis ka yin pa’i phyir //
ngo bo’i sgo nas dbye ba yod min te //
dgag bya log tshul sgo nas ldog pas dbye // 540
theg pa chung dang chen po’i rigs so sor //
rjes su bzung phyir rgyal bas ’di gnyis gsungs //
’di yi yul gyi dgag bya dngos mi srid //
yul can dgag bya log rtog yin phyir zlog //
dngos na yod med su yis dgag sgrub[240] nus // 545
de bzhin nyid la kun rdzob chos kyi[241] bdag /

---

236 D: *zhes.*
237 DL: *bltos.*
238 B: *bsgrub.*
239 L: *med de.*
240 DL: *bsgrub.*
241 L: *kyis.*

nam yang med pa chos kyi bdag med de //
don dam las gzhan chos rnams rang ngo bor //
gdod nas ma grub de yang rnam grangs pa //
rnang grangs[242] mngon lkog chos kun gang la yang // 550
bdag dngos nam yang mi srid de tsam la //
gang zag bdag med (D. 25a) ces[243] su tha snyad mdzad[244] //
chos rnams[245] kun la 'di gnyis khyab pa'i phyir //
chos kun gyi ni spyi yi mtshan nyid do //
rje btsun gyis kyang /[246]
rang dang rang gi bdag nyid du // 555
med phyir rang gi ngo bo la //
mi gnas phyir dang 'dzin bzhin te //
med phyir ngo bo nyid med 'dod //[247] [MSA 11. 50]
(L. 37b) phyi ma phyi ma'i rten yin pa'i[248] //
ngo bo nyid ni med pa yis // 560
skye med 'gag med gzod nas zhi[249] //
rang bzhin mya ngan 'das pa 'grub[250] //[251] [MSA 11. 51]
thog ma dang ni de nyid gzhan nyid dang //
rang gi mtshan nyid rang dang gzhan du 'gyur //
kun nas nyon mongs pa dang khyad par las // 565
skye ba med pa'i chos la bzod par bshad //[252] [MSA 11. 52]
de dag skye ba gtan med rnam grangs te //
ri mo'i dpe dang chu rnyog dwangs pa[253] sogs //

---

242 B: *snang grags.*
243 DM: *zhes.*
244 DM: *mdzod.*
245 D: *rnam.*
246 D: *//.*
247 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 11. 50 (Lévi 1907, p. 67):
svayaṃ svenātmanā 'bhāvātsvabhāve cānavasthiteḥ /
grāhavattadābhāvāc ca niḥsvabhāvatvamiṣyate //
248 LM: *pas.*
249 L: *zhing.*
250 L: *grub.*
251 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 11. 51 (Lévi 1907, p. 67):
niḥsvabhāvatayā siddhā uttarottaraniśrayāḥ /
anutpādo 'nirodhaś cādiśantiḥ parinirvṛtiḥ //
252 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 11. 52 (Lévi 1907, p. 68):
ādau tatve 'nyatve svalakṣaṇe svayamathānyathābhāve /
saṃkleśe 'tha viśeṣe kṣāntir anutpattidharmoktā //

skye ba (M. 62) bden par med pa'i rnam grangs so //
skye med dgongs pa'ang de ltar shes par[254] byos // 570
snying po'i[255] rtag pa gang zag bdag med dang //
rnam pa kun ldan khyab pa'i rang bzhin ni //
chos bdag med pa'i stong gzhir dgongs pa yin //
'di ni sgra rtog dgag sgrub yul las 'das //
gcig dang tha dad skye 'gag spros dang bral // 575
de phyir sngar gyi rig[256] pas mi khegs[257] te //
khang ba'i[258] mtshan nyid bkag pas ljon shing bzhin //
bdag med gnyis kyi dgag phyogs don dam pa'i //
rnam grangs tsam yin stong gzhi don dam dngos //
'di na gzhi lam 'bras chos 'ga' yang med // 580
sangs rgyas chos sku kho na bden par gnas //
don dam dpyod byed rigs pa kun gyi gnas[259] //
gang gang de de'i ngo (L. 38b) bo khyad par sogs //
gcig dang tha dad dpyod dam 'gal ba tshol //
yin phyir dpyod[260] (B. 38) tshul thams cad de la 'dus // 585
thal rang gzhung rnams bden pa'i de de med //
yod na 'di ltar yod dgos zhes smra ba'i //
gsang tshig 'di ni gang dgos kun la sbyor //
'di ni dpyad na rigs pa min pa mang //
bya byed bden pa mi srid ci ste[261] bden // 590
ltos[262] med tha dad kho na[263] dgos zhes pa //
ri bong mgo (D. 25b) la dwa[264] med yod na ni //
dkar por yod kyi gzhan min zer dang mtshungs //
rang gzhan gnyis ka mi 'dod dngos mi srid //

---

253 DL: *dang ba.*
254 D: *pa.*
255 M: *po.*
256 L: *rigs.*
257 L: *khogs.*
258 L: *pa'i.*
259 M: *gnad.*
260 D: *dphyod.*
261 L: *te.*
262 DL: *bltos.*
263 L: *nar.*
264 M: *rwa*; L: *ra.*

de ’dra’i mtshan nyid ’jog pa blun po’i lugs // 595
brtags[265] don tshol[266] byed ltar snang kun bor nas //
yang dag rigs[267] pa’i lam la ’jug par byos //
zhes[268] bdag med gnyis gtan la dbab pa’i rab tu byed pa ste drug pa’o // //[269]

参考文献

Bhattacharya, Vidhushekhara
1960 *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva*. Calcutta: The Asiatic Society
舟橋尚哉(Funahashi, Naoya)
1965 「煩悩障と所知障と人法二無我」『仏教学セミナー』1, pp. 52-66.
Hahn, Michael
1982 *Nāgārjuna’s Ratnāvalī Vol. 1*. Bonn: Indica et Tibetica verlag.
早島理(Hayashima, Osamu)
1985 「人法二無我論―瑜伽行唯識学派における―」『南都仏教』54, pp. 1-18.
本多恵(Honda, Megumu)
2005 『ダルマキールティの『認識批判』』平楽寺書店.
梶山雄一(Kajiyama, Yuichi)
1976 「唯識二十論」『大乗仏典15　世親論集』中央公論社.
金倉圓照(Kanakura, Yensho)
1965 『悟りへの道』平楽寺書店.
笠松單伝(Kasamatsu, Tanden)
1939 「入中観論(Madhyamakāvatāra)に於ける観我の要項」『仏教研究』3-3, pp. 106-109.
片野道雄(Katano, Michio)、ツルティム・ケサン(Tsultrim Kelsang Khangkar)
1998 『ツォンカパ　中観哲学研究II　『レクシェーニンポ』―中観章―和訳』文栄堂.
Lang, Karen
1986 *Āryadeva’s Catuḥśataka*. Copenhagen.
Lévi, Sylvain
1907 *Mahāyāna-sūtrālaṃkāra: Exposé de la doctrine du grand véhicule*, tome I: texte. Paris.
1925 *Vijñaptimātrartāsiddhi*. Paris.
光川豊藝(Mitsukawa, Toyoki)

265 D: *rtags*.
266 B: *’tshol*.
267 L: *rig*.
268 M: *zhes pa*.
269 D: *//*.

1962　「「人法」二無我に対する清弁と月称の見解―中論第十八章を中心として」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』1 pp. 132-135.

Miyasaka, Yosho

1972　"Pramāṇavārttika-kāriā (Sanskrit and Tibetan)", *Acta Indologica* 2, pp. 1-206.

長尾雅人(Nagao, Gadjin M.)

1964　Madhy*ānta-vibhāga-śāstra.* Tokyo.

1976　「中辺分別論」『大乗仏典15　世親論集』中央公論社.

1982　『摂大乗論　上』講談社.

小川一乗(Ogawa, Ichijo)

1976　『空性思想の研究―入中論の解読―』文栄堂.

三枝充悳(Saigusa, Mitsuyoshi)

1985　『中論偈頌総覧』第三文明社.

櫻井智浩(Sakurai, Tomohiro)

2002　「ダルマリンチェン造Bodhicaryāvatāra注釈、rGyal sras 'jug ngogs における人法二無我論」『日本西蔵学会会報』47, pp. 19-30.

篠田正成(Shinoda, Masashige)

1982　「阿毘達磨雑集論に於ける人法二無我―三十頌安慧釈を手がかりとして―」『筑紫女学園短期大学紀要』17, pp. 1-15.

ツルティム・ケサン(Tsultrim Kelsang Khangkar)、高田順仁(Takada, Yorihito)

1996　『ツォンカパ　中観哲学研究 I　『菩提道次第論・中篇』―観の章―和訳』文栄堂.

安井広済(Yasui, Kosai)

1974　「入楞伽経に現れる人法二無我の教説について」『仏教学セミナー』19, pp. 11-25.

宇井伯壽(Ui, Hakuju)

1961　『大乗荘厳経論』岩波書店.

瓜生津隆真(Uryuzu, Ryushin)

1974　「宝行王正論（一連の宝珠―王への教訓）」『大乗仏典14　龍樹論集』（中央公論社.

身延山大学仏教学部教授

Professor,

Faculty of Buddhism,

Minobusan University

Minobu, Japan